歴史エッセイ

人間紀行

杉本苑子

文春文庫

歴史エッセイ　人間紀行

定価はカバーに
表示してあります

1989年9月10日　第1刷

著　者　杉本苑子
発行者　豊田健次
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-722413-5

文春文庫

歴史エッセイ 人間紀行

杉本苑子

文藝春秋

歴史エッセイ 人間紀行

目　次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

生きざま死にざま

辞世が語る人間群像　11
清水宗治の割腹　25
佐々木道誉のバサラ人生
——日本的アウトローの系譜——　51
和泉式部・その豊満な性と生　59
織田信長を殺したもの　70
女のたたかい「大坂夏の陣」　83
それでも生きた絵島　98
若さの哀れ・曾我兄弟の死

芸道と宗教

巨人　雪　舟　115
世阿弥を紀行する　135
利休失脚の謎　154
手紙から見た最澄と空海　169
布施と救済の限界
——叡尊・忍性・光明皇后——
206
法然の信仰　216
解説　神谷次郎　257

歴史エッセイ 人間紀行

生きざま死にざま

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

辞世が語る人間群像

冒頭から、いきなり持ち出す例にしては、いささか気がひけるけれども、『古今著聞集』につぎのような話が載せられている。道心堅固、一生不犯で通した高徳の老尼が、いよいよ臨終正念の場となったので、弟子尼たちが枕頭に集まって、どんなありがたい遺偈遺戒がその口から洩れるか、かたずをのんで見まもるうち、皺んだ唇がもぐもぐ動いた。

「まらが来るぞよ、まらが来るぞよ」

一編の風流譚として笑いとばすには、少々もの悲しすぎる本音の吐露といえよう。男を寄せつけなかったがゆえに、かえってますます意識下で肥大した男性性器への興味と、受け入れ願望……。死にぎわの昏睡のなかで、はからずもそれが表面に出たわけであった。

麻酔を打たれたり、病苦に冒されての朦朧状態にあやつられて、恥さらしな口走りをしたくないとは、だれもが思うところで、人間にはやはり、どうしても、気どりや見栄や自尊心がついてまわる。一生の幕の引き納めともなれば、まして可能なかぎりじたばたせず、みぐるしい

有様を見せずに終わりたいと考えるのは自然だが、日本人に、ことにその傾向が強いのは国民性だろうか。

辞世の和歌、詩、狂歌、俳句などのおびただしさ……。こういうものを、文化遺産中、りっぱにひとつのジャンルを形成するほど数多く制作した民族というのは、他に類例をみない。稀有の珍現象である。

それというのも、辞世のひとつも詠むゆとりを、死に臨んで示したいとする心理が、つよく日本人を支配していたからで、

「鳥の死ぬやその声悲しく、人の終わるやその言、善しと、先哲も訓されたではないか、まらが来るなどとは、とんでもない。そういうあさましい終わり方はしたくない。できれば善言のひとつも吐き、従容として死を迎えたい」

とのブレーキが、つねづね働いた。仏教哲理、儒教倫理の影響というなら、中国、朝鮮の人にだって同様の傾向がみられてよいはずである。やはりこれには、三十一文字、十七文字といった短詩型で、比較的手がるに辞世が作れる――つまり、ゆとりが示せるという日本ならではの、独特の理由が考えられるのではあるまいか。

だれしも死ぬのはこわい。この世での最後の置き土産など懸命に案じていれば、そのあいだだけでも恐怖を忘れる。取り乱さずにすむ。辞世作りは、トランキライザーの役目をも果たしただろうし、死んでゆく当人に、自身の越し方を静かに思い起こさせ、六十年、七十年にわたる生き身の戦いの、収支決算を改めて計量させる機会も与えたであろう。

露と置き露と消へにし我が身かな浪華(なには)のことも夢のまた夢

有名な豊臣秀吉の、この述懐などに接すると、秀吉本人ならずとも、「聚楽第、大坂城の繁栄は、西空をいろどるひとときの夕映えにすぎなかったのではないか。天下人(びと)の死とともに覇業の実体も消えうせる。英雄一生のトータルは、差し引きゼロのはかなさだったのだな」

といった感懐に捉われる。

もっとも、秀吉のこの一首は、厳密にいえば辞世ではない。末期(まつご)の少し前に詠まれたもので、「いざとなってはまに合わぬ。頭がたしかなうちに作っておこう」

とする配慮は当然、だれもが持ったし、それが行きすぎると当人が承知しての他人による代作、さらには当の本人があずかり知らぬ没後に、まことしやかに行なわれる偽作にまでエスカレートした。

かかるときさこそ命の惜しからめかねて亡き身と思ひ知らずば

これなど太田道灌の辞世ということになっているけれどもとんでもない。嘘八百である。扇谷上杉邸におびき寄せられ、湯殿で騙(だま)し討ちに遭ったさい、道灌の口からほとばしったの

は、「当方滅亡ッ」のひとことだった。主君でいながら柱石の臣の自分をけむたがり、謀殺するようでは上杉定正どののご運もすでに尽きた、お味方は滅亡だッと叫んだ悲痛さは、どんな辞世にもまして私たちの肺腑をえぐる。

でも、それではものたりない。道灌ほどの武将ともなれば危急存亡の場合といえども、辞世のひとつふたつ詠まぬことにはサマにならぬと考えた江戸時代のお節介屋が、勝手に偽作した教訓臭のつよい嫌味な和歌で、こういう策謀を「贔屓の引き倒し」というのだろう。

さかのぼると、辞世の系譜は『万葉集』まで行きつく。継母の持統女帝に忌まれ、謀叛のぬれぎぬを着せられて死んだ天武帝の遺児大津皇子が、

ももづたふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ

とくちずさんだ一首などは、まごうかたなく死を眼前にしての絶唱である。二十四歳でいま、終わらねばならぬ命……。見納めの鴨の姿に涙しつつ、思わず洩らした嗟嘆だけに、後世の辞世にみるようなわざとらしさ、外聞を念頭に置きすぎた作り物の、無理や技巧がない。中大兄皇子らの挑発にのせられ、やはり叛意を疑われて殺された有間皇子が、

磐代の浜松が枝を引き結び真幸くあらばまた還り見む

と、ひとすじののぞみに、万一の僥倖を託した心情も哀れだ。もし運よく生きて再び通れたら、帰り道にもう一度見ようとの祈りをこめて、結び合せた浜辺の松の小枝……。二度としかし、皇子はそれを目にすることなく縊り殺されたのであった。

民族性とはいっても、まだ万葉のころは、辞世に対する慣例や固定観念のごときものは生れていない。この世での最後の諷詠だからといって妙にいきばったり飾ったり、悟ったような言辞など弄さなかった。恐れにしろ嘆きにしろ惑いにしろを、率直に表現した点では、恋をうたい花鳥をうたい風景をうたう気持とすこしも差異はない。正直に人間の赤裸な気持を流露させているために、かえって強く私たちを搏つのである。

中世にまでくだってくると、しかし次第に辞世を詠む心理に〝定型〟のごときものが作られはじめる。社会の表面に武士という階層が登場し、その精神の師表として禅が導入されて、禅僧らの臨終の偈などが伝わってくると、新鮮な驚きが生じるのは当然だった。たとえば蒙古兵に囲まれながら、

乾坤ハ孤節ニ卓シテ地無ク
喜ビ得ス人空　法モ亦空
珍重ス大元　三尺ノ劍
電光影裏　春風ヲ斬ル

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com